

●原 著

日本呼吸器学会総会（1996～2015年）参加者に対する喫煙アンケート調査

北村 諭^a 小林 淳^a 奥山 顕子^b

要旨：1996年から2015年までの20年間に開催された本学会総会のうち、9回の総会において喫煙に関するアンケート調査を実施した。参加者の喫煙率は、20年間で22.7%から2.2%に低下し、医師に限定すると、12.9%から1.2%と著明に低下した。回答者の施設が全面禁煙である割合は、7.5%から80.4%と増加したが、禁煙指導の実施状況は80%台にとどまった。施設による禁煙対策や会員の禁煙指導への取り組みは、まだ十分とはいえない。

キーワード：日本呼吸器学会総会，喫煙アンケート調査，喫煙率

Annual meeting of the Japanese Respiratory Society, Questionnaire survey about smoking, Smoking prevalence

緒 言

日本呼吸器学会は、1997年に日本の医学会で最初に「喫煙に関する勧告¹⁾」を行い、医療従事者をはじめとするすべての国民に禁煙を強く勧告した。その後、2003年には「禁煙宣言²⁾」を学会で採択した。それは3本の柱からなり、「①すべての会員は非喫煙者を目指す」「②本学会の専門医は非喫煙者であることを資格条件とする」「③開催するすべての会議において会場施設内を完全禁煙とする」という、当時としては、かなり厳しいものであった。そこで、本総会参加者の喫煙の実態と禁煙に対する意識を検討する目的でアンケート調査を実施した。

対象と方法

対象は、1996年、1999年、2001年、2003年、2005年、2007年、2010年、2012年、2015年に開催された日本呼吸器学会総会の参加者全員で、参加受付場所においてアンケート用紙（無記名）を配布し、その場で記載してもらい、直ちに回収した。

アンケートの内容は以下のとおりである。①現在の喫煙歴、②過去の喫煙習慣、③所属施設が全面的に禁煙か否か、④医師および患者の分煙、⑤施設内タバコ販売（自

動販売機・売店）、⑥禁煙指導の有無、その方法、⑦年齢・性・職業。

対象者の年齢は平均値±標準誤差で示した。

結 果

結果の概要をTable 1に示した。アンケート配布数は3,101～5,220枚、回収率は48.6～93.2%で、平均回収率は75.1%であった。総会出席者全員の喫煙率は、1996年の22.7%から漸減して2015年には2.2%となった。医師のみの喫煙率は、2001年の12.9%から漸減して2015年には1.2%となった。過去の喫煙習慣としては、喫煙常習者、過去喫煙者、喫煙経験なしの3群となるが、喫煙経験なしの割合が経年的に増加している（Fig. 1）。喫煙率の推移を示したグラフがFig. 2である。全体、男性、女性の喫煙率は、右肩下がりで低下しており、特に2005年の低下率が著明である。

医師と医師以外に分けた場合の喫煙率の推移を示したのがFig. 3である。医師の喫煙率は、2005年から激減しているが、これは、2003年の学会による禁煙宣言が大きく影響しているものと思われる。

Fig. 4は男性の年齢別にみた喫煙率の年次推移である。図からも明らかのように、喫煙率は若い世代ほど高い傾向があり、経年的に低下しており、特に2005年の低下率が著しい。Fig. 5は男性医師の喫煙率の年次推移をみたもので、各年代で、経年的に低下傾向がみられるが、2005年の低下は顕著である。全面禁煙の施設からの参加者数は経年的に増加しているが（Fig. 6）、80%台でほぼ横ばい状態となっている。Fig. 7は施設内でのタバコ販売状況の年次推移を示したものである。自動販売機、院内売

連絡先：北村 諭

〒323-0803 栃木県小山市北飯田74-2

^a 南栃木病院呼吸器内科

^b 自治医科大学呼吸器内科

(E-mail: k.satosi@dream.ocn.ne.jp)

(Received 9 Aug 2019/Accepted 3 Oct 2019)

Table 1 Summary of nine studies

Year	1996	1999	2001	2003	2005	2007	2010	2012	2015
A: Attendants (n)	NA	NA	4,411	4,067	4,685	5,336	5,823	6,145	7,476
D: Distribution (n)	3,725	4,050	4,411	3,913	3,101	3,302	4,035	4,000	5,220
R: Recovery (n)	2,411	2,849	2,143	2,041	2,665	3,077	3,542	3,384	4,636
Recovery rate									
R/A	NA	NA	48.6%	50.2%	56.9%	57.7%	60.8%	55.1%	62.0%
R/D	64.7%	70.3%	48.6%	52.2%	85.9%	93.2%	87.8%	84.6%	88.8%
Age (years old)	41 ± 11	41 ± 10	41 ± 13	41 ± 11	41 ± 13	41 ± 13	42 ± 14	42 ± 15	42 ± 15
Gender									
Male	87%	84%	85%	85%	82%	78%	79%	78%	76%
Female	10%	11%	12%	13%	16%	20%	18%	18%	21%
Unknown	3%	5%	3%	2%	2%	2%	3%	4%	3%
Smoking prevalence									
All answered	22.7%	19.7%	15.1%	13.9%	7.9%	5.8%	3.7%	3.0%	2.2%
Physicians	NA	NA	12.9%	12.7%	5.1%	3.9%	2.4%	1.6%	1.2%

NA : not available.

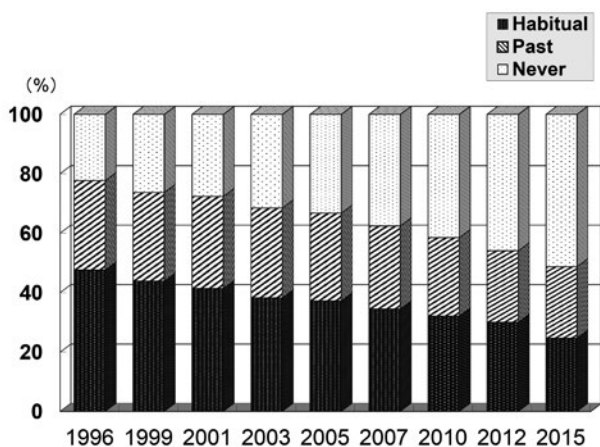


Fig. 1 Smoking habit in the past.

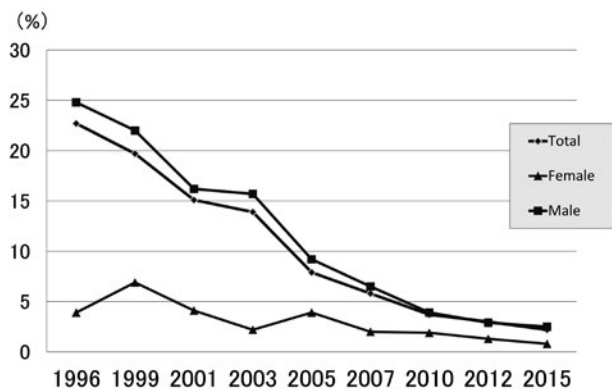


Fig. 2 Smoking prevalence in these 20 years.

店ともに順調に低下している。

医師の禁煙指導についてまとめたものが、Fig. 8である。「あなた（医師）は患者に禁煙を勧めますか？」とい

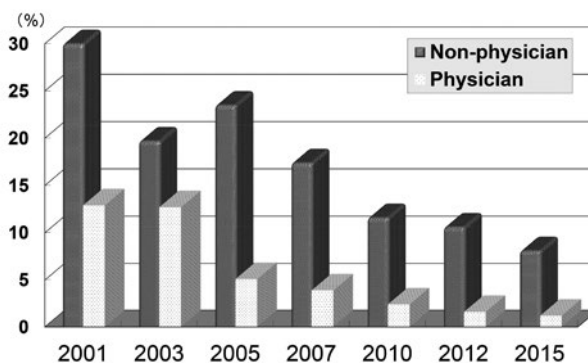


Fig. 3 Classified smoking prevalence in physicians and non-physicians.

う設問に対して、頻繁に勧めるという回答者は70%台から80%台へと徐々に増加しているが、未だ90%には到達していない。最後に禁煙指導の方法についての設問に対して、2010年からは、ニコチンパッチが減少して、バレニクリン（varenicline）の内服が増加している（Fig. 9）。

考 察

本会総会参加者の喫煙率は1996年から2015年までの20年間で、22.7%から2.2%まで著明に低下した。それを医師のみで検討すると、2001年から2015年までの間で、12.9%から1.2%までに急激に低下した。過去の喫煙習慣をみると、過去喫煙者が漸減して、喫煙経験のない世代が漸増していることがわかる。男性医師の年代別喫煙率は、各年代で経年的に低下しており、2005年の低下率は顕著である。全面禁煙の施設からの参加者は経年的に増加しており、80%台で横ばいの傾向がみられたが、恐らく現状では、ほぼ100%に到達しているものと思われる。施設内タバコ販売は、自動販売機、院内の売店の両者

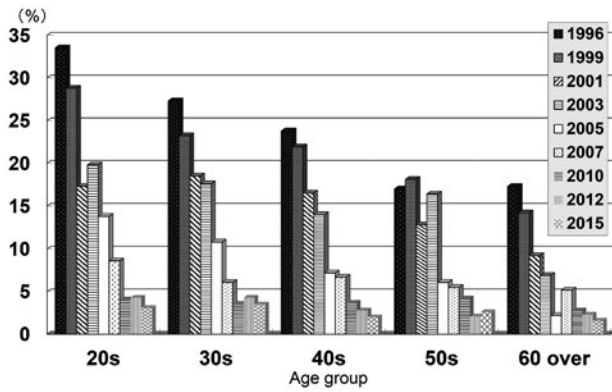


Fig. 4 Smoking prevalence in male JRS attendants.

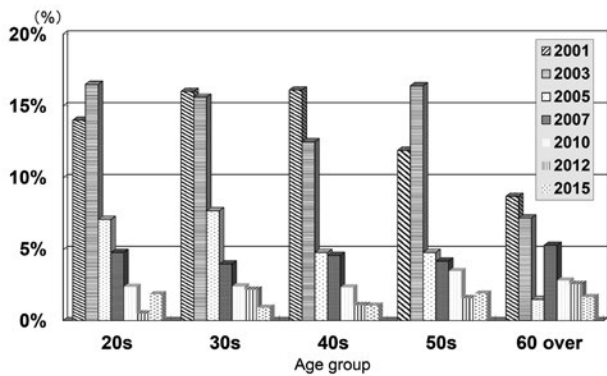


Fig. 5 Smoking prevalence in male physicians.

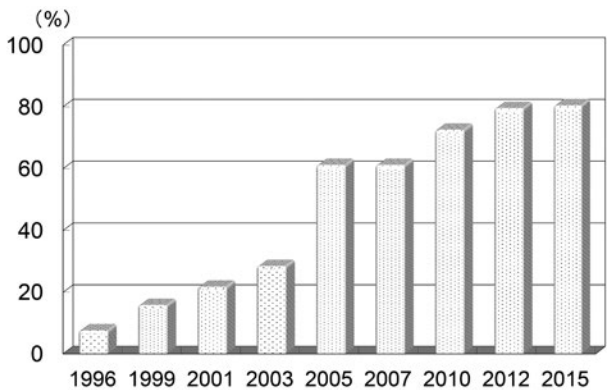


Fig. 6 Attendants from smoke-free hospital.

で激減しているが、現在では、恐らく0%に到達している可能性が高い。禁煙指導の実施状況は回答者の80%台にとどまっていたが、現状では喫煙者が激減しており、禁煙指導の必要性そのものがなくなってきている可能性が考えられる。禁煙指導の方法では、2010年からはニコチンパッチに代わって varenicline の使用が増加している。本アンケート調査については、1996年に実施した第1回調査結果を1997年に詳細に報告した³⁾。

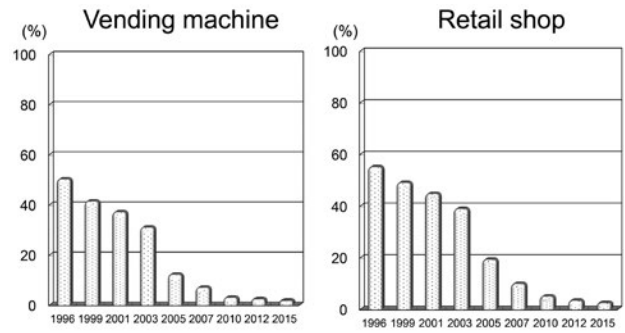


Fig. 7 Tobacco sales in the hospital.

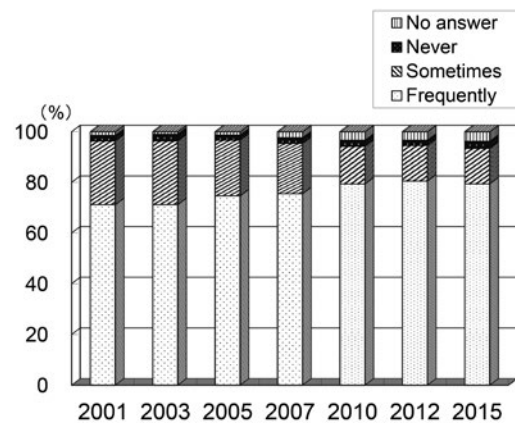


Fig. 8 Do you ask patients to quit smoking?

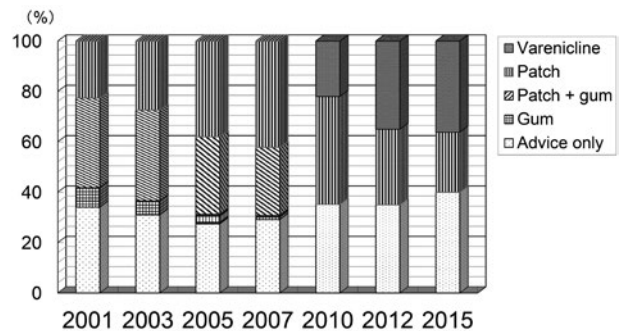


Fig. 9 Tools to quit cigarette smoking.

著者らが最初にこのアンケート調査を発表したのは、2008年の欧州呼吸器学会（European Respiratory Society: ERS）のベルリン大会であった⁴⁾。その会議では1996年から2007年までの6回の調査結果を発表し、2007年の医師の喫煙率は3.9%であった。2009年のウィーンでのERS学術総会では、2000年から2008年までの4回の日本アレルギー学会総会での同様なアンケート調査結果を発表した⁵⁾。さらに2010年にバルセロナで開催されたERSの総会では1996年から2010年までの7回の調査結果を発表し、2010年の医師の喫煙率は2.4%であった⁶⁾。

2012年までの調査結果については同年にウイーンで開催されたERSで発表した⁷⁾.

2015年の最終調査では医師のみの喫煙率が1.2%とさらに低下しており⁸⁾, 日本呼吸器学会の会員の喫煙習慣に対する取り組みがいかに厳しいものであったかを如実に物語るものといえよう.

日本呼吸器学会としては, 現在, 会員の喫煙率も限りなくゼロに近づき, 施設の全面禁煙もほぼ達成されたものと思われる. これからの会員は何をなすべきであろうか?

2018年のJT (日本たばこ産業) 調査⁹⁾によると, 成人喫煙率は17.9% (男: 27.8%, 女: 8.7%) とわが国の喫煙率も著明に低下している. 近年, 紙巻タバコから電子タバコ等へ乗り換えている人が多く, 電子タバコの規制も大きな課題である. また2020年のオリンピック開催に向けて受動喫煙防止に向けての取り組みも喫煙の課題となっている. 我々会員もわが国から喫煙者を根絶するために一層の努力が必要である.

著者のCOI (conflicts of interest) 開示: 本論文発表内容に関して申告なし.

引用文献

- 1) 一般社団法人日本呼吸器学会. 喫煙に関する勧告. 1997年.
https://www.jrs.or.jp/modules/citizen/index.php?content_id=76 (accessed on November 14, 2019)
- 2) 一般社団法人日本呼吸器学会. 禁煙宣言. 2013年.
https://www.jrs.or.jp/modules/citizen/index.php?content_id=136 (accessed on November 14, 2019)

- 3) 小林 淳, 他. 第36回日本胸部疾患学会参加者の喫煙に関する意識調査結果から. 日胸疾患会誌1997; 35: 863-6.
- 4) Kitamura S, et al. Repeated questionnaire about smoking at the annual meetings of the Japanese Respiratory Society held in 1996, 1999, 2001, 2003, 2005 and 2007. *Eur Respir J* 2008; 32 (Suppl): 327.
- 5) Kitamura S, et al. Repeated questionnaire about smoking at the annual meetings of the Japanese Society of Allergology held in 2000, 2002, 2005 and 2008. *Eur Respir J* 2009; 34 (Suppl): 189.
- 6) Kobayashi J, et al. Repeated questionnaire about smoking at the annual meetings of the Japanese Respiratory Society held in 1996, 1999, 2001, 2003, 2005, 2007 and 2010. *Eur Respir J* 2010; 36 (Suppl): 390.
- 7) Kobayashi J, et al. Repeated questionnaire about smoking at the annual meetings of the Japanese Respiratory Society held in 1996, 1999, 2001, 2003, 2005, 2007, 2010, and 2012. *Eur Respir J* 2012; 40 (Suppl 56): 192.
- 8) 小林 淳, 他. 日本呼吸器学会総会 (1996-2015) 参加者における喫煙アンケート調査から. 日呼吸会誌2016; 5 (Suppl): 158.
- 9) 公益財団法人健康・体力づくり事業財団. 厚生労働省 最新たばこ情報 成人喫煙率 (JT全国喫煙者率調査). 2018年.
<http://www.health-net.or.jp/tobacco/product/pd090000.html> (accessed on November 14, 2019)

Abstract

Questionnaire survey about smoking distributed at the annual meetings of the Japanese Respiratory Society between 1996 and 2015

Satoshi Kitamura^a, Jun Kobayashi^a and Akiko Okuyama^b

^aDepartment of Respiratory Medicine, Minami-Tochigi Hospital

^bDepartment of Respiratory Medicine, Jichi Medical University

Questionnaires were distributed at the annual meetings of the Japanese Respiratory Society (JRS) held in 1996, 1999, 2001, 2003, 2005, 2007, 2010, 2012, and 2015. The smoking prevalence among JRS attendants has reduced from 22.7% to 2.2% over the past 20 years. Notably, the smoking prevalence among physicians reduced from 12.9% to 1.2%. The percentage of attendants from smoke-free hospitals markedly increased from 7.5% to 80%. In-hospital tobacco sales through vending machines and retail shops markedly reduced. In conclusion, the smoking behavior among meeting attendants has markedly improved over these 19 years, especially in physicians. However, more powerful action is needed to promote a no-smoking campaign and passive smoking prevention.